

- 1 . これらすべてのことが終わると、
そこにいた全イスラエルは、ユダの町々に出て行き、石の柱を打ちこわし、アシェラ像を切り落とし、
全ユダとベニヤミンの中から、エフライムとマナセの中から、高き所と祭壇を取りこわして、絶ち滅ぼした。
そして、イスラエル人はみな、おのおのその所有地、それぞれの町へ帰って行った。
- 2 . ヒゼキヤは、祭司とレビ人の組を定め、祭司とレビ人に、
それぞれその奉仕に応じて、おのおのの組ごとに、
全焼のいけにえと和解のいけにえをささげさせ、
さらに、主の宿営の門で仕え、感謝し、ほめたたえさせた。
- 3 . また、主の律法にしろされているとありに、 כִּכְתוּב בְּתוֹרַת יְהוָה Qal.pass.pt.
朝夕の全焼のいけにえ、安息日、新月の祭り、
例祭ごとにささげる全焼のいけにえのため、王の分は王の財産から出した。 וּמִנֶּת הַמֶּלֶךְ מִן־כֹּשֶׁוֹ
- 4 . さらに彼は、エルサレムに住む民に、祭司とレビ人の分を与えるように命じた。 portion
祭司とレビ人が主の律法に専念するためであった。

וַיֹּאמֶר לָעַם לְיוֹשְׁבֵי יְרוּשָׁלַם לָתֵת מִנֶּת הַכֹּהֲנִים וְהַלְוִיִם לְמַעַן
portion

יִתְחַזְקוּ בְּתוֹרַת יְהוָה *hold firmly to, devote oneself to,* しがみつく、専念する
Qal.impf. *be or grow strong, prevail over, upon, of word of king* 蔓延る 圧倒支配する *be caught fast, of Absalom's head*

- 5 . この命令が広まるとともに、イスラエルの人たちは、
穀物、新しいぶどう酒、油、蜜など、すべての野の収穫の初物をたくさん持って来た。
彼らはすべてのものの十分の一を豊富に携えて来た。
- 6 . ユダの町々に住むイスラエルと、ユダの人たちもまた、牛や羊の十分の一と、
彼らの神、主に聖別した聖なるささげ物の十分の一を携えて来て、あちらこちらに山と積んだ。
- 7 . 第三の月に、彼らは積み始め、第七の月に終わった。
- 8 . ヒゼキヤとつかさたちは、はいて来て、積んだ山を見、主とその民イスラエルをほめたたえ、祝福した。
- 9 . それから、ヒゼキヤは、その積んだ山について、祭司とレビ人に説明を求めた。
- 10 . すると、ツァドクの家のかしら、祭司アザルヤが彼に答えて言った。
「人々が奉納物を主の宮に携えて来始めてから、食べて、満ち足り、たくさん残りました。
主が御民を祝福されたからです。
その残りがこんなにたくさんあるのです。」
- 11 . そこで、ヒゼキヤが主の宮の脳部屋を整えるよう命じたので、彼らは整えて、
- 12 . その奉納物と十分の一と聖なるささげ物を忠実に携え入れた。
彼らを指図したつかさは、レビ人カナヌヤであり、その兄弟シムイは、副指揮者であった。
- 13 . エヒエル、アザズヤ、ナハテ、アサエル、エリモテ、エホザパデ、エリエル、イスマクヤ、マハテ、ペナヤは、
ヒゼキヤ王と神の宮のつかさアザルヤの任命によって、カナヌヤとその兄弟シムイを助けて、管理者となった。
- 14 . また、レビ人イムナの子コレは東の門の門衛であったが、
神に進んでささげるささげ物をつかさどり、主の奉納物と最も聖なるささげ物を分配した。

- 15 . 彼の下には、エデン、ミヌヤミン、ヨシュア、シェマヤ、アマルヤ、シェカヌヤがいて、
忠実に祭司の町々にとどまり、彼らの兄弟たちに、各組にしたがい、上の者にも下の者にも分配した。
- 16 . ただし、三歳以上の男子で、すべて毎日の日課として、
組ごとに任務につき奉仕に当たるために、主の宮にはいる者として系図に載せられた人々は、別であった。
- 17 . 父祖の家ごとに祭司として系図に載せられた者、
および、二十歳以上のレビ人で系図に載せられた者で、組別にその任務につく人々も別であった。
- 18 . また、全集団のうち、すべて系図に載せられた幼児、妻たち、息子たち、娘たちに分配した。
彼らは、聖なるささげ物を、忠実に、聖なる物として扱ったからである。
- 19 . おおのこの町の放牧地の野にいたアロンの子らである祭司たちのためには、
どの町にも、その名の示された者たちがいて、
祭司たちのすべての男子、および、レビ人ですべて系図に載せられている者に、その受ける分を与えた。
- 20 . ヒゼキヤはユダ全国にこのように行ない、その神、主の目の前に、良いこと、正しいこと、誠実なことを行なった。
- 21 . 彼は、彼が始めたすべてのわざにおいて、
すなわち、神の宮の奉仕、律法、命令において神に求め、心を尽くして行ない、その目的を果たした。

説教

ヒゼキヤは、

紀元前 716 年頃に、25 歳の若さで南王国ユダの王になり、29 年間ユダを統治しました。

彼は自分が王に即位するなり宗教改革に着手します。

当時は、

兄弟国の北王国イスラエルが既にアッシリアにより滅ぼされ、

南王国ユダの先行きも風前の灯火と言うべき極めて危機的な時代でした。

ヒゼキヤはおよそ弱冠 8 歳にして隣国があっけなくアッシリアによって滅亡するのを目の当たりにすることになります。

このため、父アハズは

大国アッシリアの支配下に屈従する政策を選択することにより一時的な安泰を得てはいたものの、

その代償として、アッシリアの神々を大々的に導入して偶像崇拜にのめり込んでいきました。

そこで、ヒゼキヤは、即位するなり、まず閉鎖されていた主の神殿の扉を開いて宮きよめを行います。

16 日間かけて、本堂にあった偶像をすべて一掃し、神殿の祭壇と器具をすべてきよめます。

そうして、

それまでささげることのなかった罪のためのいけにえをささげて祭壇を聖別し、

喜びの讃美と共に全焼のいけにえをささげて神さまへの献身を告白します。

そうして人々は神さまに感謝のいけにえをささげて心から喜んだのでした (29 章)。

それから、ヒゼキヤは、同じく

これまで怠ってきた過越のいけにえをささげるべく、

ユダ全国は勿論のこと、

既にアッシリアの支配下にあつて補囚の残党のかるうじて生き残っている北王国イスラエルに至るまで、

近衛兵を遣わして、罪を悔い改めて一緒に過越のいけにえをささげるよう勧めます。

「イスラエルの人たちよ。

アブラハム、イサク、イスラエルの神、主に立ち返りなさい。...

あなたがたが主に立ち返るなら、

あなたがたの兄弟や子たちは、彼らをとりにした人々のあわれみを受け、この地に帰って来るでしょう。

あなたがたの神、主は、情け深く、あわれみ深い方であり、

もし、あなたがたが主に立ち返るなら、あなたがたから御顔をそむけるようなことは決してなさいません。」(30:6-9)

このヒゼキヤのメッセージはほとんどの残留イスラエル人から物笑いにされますが、

彼らのうち一部とユダの全員は心からこの「主のことば」に聞き従います(30:12)。

そうして正式な過越の祭りから一ヶ月遅れて第二の月の十四日に、七日間、過越の祭りを祝います。

そのやり方は、

律法に「記されているのと異なったやり方で、

過越のいけにえを食べてしまった」者も一部いたにはいましたが、

それ以外は「神の人モーセの律法に従って」(30:16)実行されます。

こうして、合計二千頭の雄牛と一万七千頭の羊がささげられたのです。

歴代誌の記者はその際の様子を彼らが「大きな喜びをもって」祭りを祝ったと記録します(30:21)。

あまりの嬉しさのゆえに、

彼らはさらに「あと七日間祭りを祝うことを決議し、喜びをもって七日間、祭りを行った」のでした(23)。

こうして、神のことばに従って過越の祭りを祝った人々の心には大きな喜びが溢れます。

「こうして、ユダの全集団と...イスラエルから来た全集団...は、喜んだ。

エルサレムには大きな喜びがあった。...

ソロモンの時代からこのかた、こうしたことはエルサレムになかった。」(30:25-26)

ソロモン王以来およそ 250 年ぶりに

過越の祭りを祝って霊に燃やされた彼らは、

今度は自分の国に帰って偶像と偶像の礼拝所を取り壊し始めます(31:1)。

1. これらすべてのことが終わると、

そこにいた全イスラエルは、ユダの町々に出て行き、石の柱を打ちこわし、アシェラ像を切り落とし、

全ユダとベニヤミンの中から、エフライムとマナセの中から、高き所と祭壇を取りこわして、絶ち滅ぼした。

そして、イスラエル人はみな、おのおのその所有地、それぞれの町へ帰って行った。

一方、ヒゼキヤは、祭司とレビ人を組織して神殿奉仕のための役割分担を決めます。

2. ヒゼキヤは、祭司とレビ人の組を定め、祭司とレビ人に、

それぞれその奉仕に応じて、おのおのの組ごとに、

全焼のいけにえと和解のいけにえをささげさせ、

さらに、主の宿営の門で仕え、感謝し、ほめたたえさせた。

そして、律法に定められている通りに

「朝夕の全焼のいけにえ、

安息日、新月の祭り、

例祭ごとに捧げる全焼のいけにえ」をささげるには、それだけのいけにえが必要です。

このいけにえを、

ヒゼキヤはまず自分自身が「主の律法にしろされているとおりに...王の分は王の財産から出した」のでした。

3 . また、主の律法にしるされているとおりに、 כִּכְתוּב בְּתוֹרַת יְהוָה Qal.pass.pt.

朝夕の全焼のいけにえ、安息日、新月の祭り、

例祭ごとにささげる全焼のいけにえのため、王の分は王の財産から出した。 וּמִנֶּת הַמֶּלֶךְ מִן־כֹּוֹשׁוֹ

4 . さらに彼は、エルサレムに住む民に、祭司とレビ人の分を与えるように命じた。 portion

祭司とレビ人が主の律法に専念するためであった。

「主の律法にしるされているとおりに」とは、

「地の十分の一は、

地の産物であっても、

木の実であっても、

みな主のものである。

それは主の聖なるものである。」と記されている「十分の一献金」や「収穫の初穂」などのささげ物のことです。

(レビ記 27:30)

そして、ヒゼキヤは、

「祭司とレビ人が主の律法に専念する(しがみつく、しっかりと捉えられる、献身する)ため」

「祭司とレビ人の分を与えるよう命じ」ます(4)。

律法によると、

「祭司とレビ人の分」すなわち彼らの生活費となるのは、

イスラエル 12 部族のささげる「十分の一献金」でした。

「わたしは今、レビ族には、彼らが会見の天幕の奉仕をするその奉仕に報いて、

イスラエルのうちの十分の一をみな、相続財産として与える。..

彼らはイスラエル人の中にあつて相続地を持ってはならない。

それは、

イスラエル人が、奉納物として主に供える十分の一を、

わたしは彼らの相続財産としてレビ人に与えるからである。

それゆえわたしは彼らがイスラエル人の中で相続地を持ってはならないと、彼らに言ったのである。」(民数記 18:21-24)

それで、

「この命令が広まるとともに、

イスラエルの人たちは、

穀物、新しいぶどう酒、油、蜜など、すべての野の収穫の初物をたくさん持って来」ます。

「彼らはすべてのものの十分の一を豊富に携えて来た」のでした(レビ記 31:5)。

5 . この命令が広まるとともに、イスラエルの人たちは、

穀物、新しいぶどう酒、油、蜜など、すべての野の収穫の初物をたくさん持って来た。

彼らはすべてのものの十分の一を豊富に携えて来た。

6 . ユダの町々に住むイスラエルと、ユダの人たちもまた、牛や羊の十分の一と、

彼らの神、主に聖別した聖なるささげ物の十分の一を携えて来て、あちらこちらに山と積んだ。

7 . 第三の月に、彼らは積み始め、第七の月に終わった。

かくして、十分の一のささげ物が復活します。

それは、

彼らの信仰の父アブラハムがささげ(創世記 14:20)、ヤコブ(28:22)がささげ、モーセがささげ(レビ記 27:30)たものです。

不信仰な時代にはささげられませんでした。

でも神さまへの信仰が回復する時には、十分の一のささげ物も復活しました。

父アブラハムの熱い信仰が彼らのうちによみがえったのです。

そして、このようなヒゼキヤとユダの悔い改めは単に形だけでなかったということが 30:27 と 31:20,21 で証しされます。

30章

27. 彼らの祈りは、主の聖なる御住まい、天に届いた。

31章

20. ヒゼキヤはユダ全国にこのように行ない、

その神、主の目の前に、良いこと、正しいこと、誠実なことを行なった。

21. 彼は、彼が始めたすべてのわざにおいて、

すなわち、神の宮の奉仕、律法、命令において

神に求め、心を尽くして行ない、その目的を果たした。

つまり、彼らは、神さまの前に良しと認められたのです。

なぜなら、彼らが神さまの前に、良いこと、正しいこと、誠実なことを行ったからです。

心を尽くして、神さまの御心を求め、神さまに喜ばれるあり方を探し求め、神さまの戒めを守り行いました。

それで、彼らの祈りを神さまが聞いてくださったのです。

そして、続く 32章を見ると、ユダの首都エルサレムはアッシリアの攻撃を受けることとなりますが、

しかし、どう見ても勝ち目のないこの戦いに、

神さまが彼らの祈りを聞き、ひとりの天使を送って、

何と、一夜にしてアッシリア軍 18万5000人を撃って壊滅させてくださったのでした。

そうして、彼の治めるユダ王国は、国家存亡の危機を脱することができたのです。

まさしく彼らの祈りが聞かれたのです。

私たちは、いろいろと大変な問題に直面する度にどうするでしょうか。

ますます世的な考えで、この世のやり方で、世的に解決しようとするでしょうか。

それとも、このヒゼキヤのように、

まず自分の中にある偶像を取り除き、

自分の罪を神さまの前に悔い改めて、

神さまを正しく礼拝することから始めるでしょうか。

ヒゼキヤの父アハズ王は、ユダの国が危機にさらされた時、

異国の神々が御利益をもたらして助けてくれるに違いないと一層熱心に偶像崇拜に没頭していきました。

あるいは、アッシリアの王の機嫌を取ることに懸命でした。

でも、ヒゼキヤは違います。

ヒゼキヤは、自分たちの上に災いが降るのは、その偶像崇拜のせいだと考えました。

自分たちが偶像崇拜しているために神さまの燃える怒りがくだっていると考えました。

「私たちの父たちは、

不信の罪を犯し、私たちの神、主の目の前に悪を行ない、

この方を捨て去って、その顔を主の御住まいからそむけ、背を向けた、

だから、主の怒りがユダとエルサレムの上に下り、

あなたがたが自分の目で見るとおり、主は彼らを人々のおののき、恐怖、あざけりとされた。

そして、私たちの父たちは剣に倒れ、そのため、私たちの息子たち、娘たち、妻たちは、とりこになっている。」 29:6-9

それで、ヒゼキヤは、罪を悔い改めたのです。

自分たちの中から偶像を取り除きました。

まことの神を礼拝しようとしたのです。

それも、みことばの通りに、

聖書のみことばの通りに、

モーセの律法に記されている通りに、神さまを礼拝しようとしたのです。

彼は、これまで自分が見聞きしてきた父の教えに従いませんでした。

これまで父がやってきた慣わしやしきたりに従いませんでした。

否、それどころか、これまで先祖代々およそ 250 年間にも及ぶ慣わしやしきたりを完全に打ち毀したのです。

つまり、過越の祭りを行わないというしきたりです。

慣習です。

伝統です。

そして、これまで見たこともないことを導入しました。

すなわち、まことの神を礼拝するということです。

彼はそれをただ聖書から学びました。

そして、それをただ聖書から教えられて実践したのです。

こういうことは、長い旧約、新約、そしてこの二千年のキリスト教の歴史の中で何度となくあったものです。

キリスト教は最初

ユダヤ教という小さな偏狭にある宗教の中に存在する、

これまたそのユダヤ教の中でも小さな分派というより異端と見られていました。

そのような中、キリスト教会は、細々と、ただ聖書の教えのみを頼りに、心を尽くしてみことばを行っておりました。

でも、それが、やがて多くの改宗者が生じ、

勢力がアジア全域、さらにはヨーロッパにまで影響力が強まって、

遂にはローマの公認宗教になり、国教となっていくなかで、その反対給付として当然世俗化していきます。

それで、その中から、本当に純粋にみことばを実践したいという人も出て来るわけです。

そのような人々が、荒野で、あるいは町で修道院を形成していくのです。

彼らの目標は何か。

聖書のみことばです。

それは、

私的所有の完全な放棄

「もし、あなたが完全になりたいなら、

帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。

そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。

そのうえで、わたしについて来なさい。」というイエスさまのみことば

「信じた者の群れは、心と思いを一つにして、

だれひとりその持ち物を自分のものと言わず、すべてを共有にしていた。」という初代教会の姿

それで、文字通り、すべてを捨てて、修道士となります。

そして、それが、世俗化していく教会に影響を与えていくのです。

教会は教会で、世俗の権力が教会を支配しようという動きが常にあります。

そうして、教職者が墮落し、教会も世俗化していきます。

でも、そのような時に、また新たな修道会が生じて、教会を浄化していくようになります。

教職者も、修道士から見たらまるで世俗の固まりのようなものです。

それで、教職者の中にも、言うなれば修道士を兼ねた者が登場し、それが一般化していくようになるのです。

そして、それが中世の宗教改革までの一つの大きな流れとなっていくのです。

それがどうであれ、

とにかく彼らは一つの理想、一つの完全な姿を目指すのです。

それは聖書にある通りの完全な姿です。

すべてのものを主のために捨てて、「すべてを共有にする」という聖書のみことばの通りの完全な姿です。

それが最後は、13世紀の「托鉢修道士」の出現に至るのです。

ヒゼキヤも同じでした。

彼が求めたのは、聖書のみことばの通りのあり方です。

それは神礼拝の復活です。

そして、そのために自分の財をささげるということでした。

みことばの通りに、神さまが自分にくださった全ての物の十分の一を捧げて、神さまを礼拝するというものです。

私たちも同じではないでしょうか。

いろいろと難しい問題に直面しているかも知れません。

そして、祈る課題もあるでしょう。

でも、まずその前に、

私たちは、ヒゼキヤのように、

神さまの前に罪を悔い改めて、捧げるべきを捧げ、なすべきをなして、神さまの助けを祈り求めたいと思います。